



満人の家
(平房)

このまま、内地に引き返すとい
って、なん日も泣きつづけた女
もあつたという。

しかし、翌日から規律正しく、
かつ、容赦のない多忙な共同生
活が始まり、いつともなく、新
しい土地に馴染んで行ったらし
い。

家族招致に帰った隊員のうち、
一名は脱落して、再び渡満しな
かった。

ところで、隊員達の入植旅費
や、さし当つての生活費は、どう
なつていたのであるうか。重要
な事となつて少し触れてみたい。
政府は、満州農業移民要項の
中で、

「農村の疲弊の現状より、相
当の補助金を必要とし、」
と認めているが、事実、入植し
て自立までには、当時の金で三
千円近くを要し、負しい移住者
が、到底自力で準備することは

不可能で、全員、政府の援助と、
佐伯開拓団が入植した当時の資
金援助は、次の基準によつて
いた。

渡航費(全額政府負担)

二四〇円

入植後の一戸当り所要資金額

固定資金(土地・建物・家畜・
大型農機具代等)一、九〇〇円

流動資金(自立までの生活費・
営農資金費)

右に対する政府援助額
個人渡し分
六五〇円

共通経費分
一一〇円

満州拓植公社融資額

政府援助額の不足分

固定資金 五年据置 二五万償還

流動資金 五年据置 一〇万償還

金利はいずれも年利四、五%

なお、これらの資金は、団に一括して交付され、経理
されていた。(つづく)

伝承

黒澤の富尾神社の由縁

「神隔・杖隔など奉納の起原をさぐる」

会員 多田 太郎 吉

現今、有形無形の文化財保存が重要視されている折、
史談会の高木会長先生をはじめ、皆さんのご協賛により
まして、佐伯地域(南郷を含む)文化財保存会が発足さ
れましたことは、まことに結構なことで、欣快の至りに
存じます。

さて、昨年十月五日、九州民俗芸能大会が佐賀県武雄市で開催
され、私共黒澤の富尾神社の神隔と杖隔が、県教育委員会の推
奨により、県代表として出場の栄を遂げました。

このことは、前号に山崎作一さんが詳しく述べましたので、ご承知の
ことと存じます。私どもは目ばかりの保存会長であります、立場上

一言お礼申上げたいと思ひます。具代表としての重責を身に、一同熱
 演しまして万雷の拍手を蒙り、大喝采の内に無事終了し、私共感激
 のあまり、喉があつくなりました。これ全く累・市・当のそれに皆々
 の方の暖かいご援助ご指導のおかげと、心から感謝し厚くお礼申します。
 九州八県いづれも芳々放立演女芸能ばかりであり、皆先祖から承仕
 継いだものですが、私共はこれを機会に、一層の精選をつづけましょ
 う。どうか今後ご指導下さるよう、よろしくお願い申します。

さて富尾神社のご祭神は、榊牟礼城主佐伯薩摩守惟治
 公でありまして、佐伯・南郡に十数社あります富尾神社
 の本宮であります。

大永七年(一五二七)秋、榊牟礼城を去り日州へ赴く途中、
 黒沢船形で若狭という美女に出会いました。惟治公は馬
 上から「のどがかかおいて、水を所望じぬ」と申され
 ました。若狭は急いで家に帰り水をさし上げたところ大
 へんお喜びになり、「いくらあげようか」と申されまし
 た。「いいえ、代金はいりません。タダであります。」
 「それはかたじけない。して父親の姓名は——」「イエ父
 の名はタダの弥四郎であります」「そうか。それではタ
 ダという姓をあげるから、多田弥四郎と名乗るがよい。」
 と申され、それより多田姓を名乗るようになったとこの
 とです。今も黒沢部落に多田姓が六戸あります。

惟治公は家来二十余人とともに暫く黒沢に居られ、村
 人達が食糧などを運んでいました。惟治公は「今後、黒沢
 を町にしてあげよう」と申されたといひます。(足田泉先生
 のお話し)若狭は恐らく惟治公の側近くお仕え申したことで
 しよう。

惟治公は若狭に向い「私は故あつて暫く日州へ赴かぬ
 ばならないが、やがて立寄り再び榊牟礼城主となる。そ
 の時、あなたを妻に迎えるから待っていてくれ」と申
 され、日州へと向われた。

途中、黒沢の奥ハリマ谷と若山谷の間にある、馬場の尾という所

に登るのに、若山谷の入口にハタガ谷という小さな谷があります。葉
 をかついでこの谷を登り、尾根依り馬場の尾にたどりつき、ここ
 にもしばらくおられたという伝説もありません。

それから石神峠を越して三川内を下り、大井に宿りお世話にな
 られたお礼に、尾波という姓を与えたといひます。今も大井には尾波
 という姓があるそうです。

ところが日州では新名族が待ち伏せており、大友家と大井長
 景の謀略であったことがわかりました。そこで峠を越して礼市展へ出て
 四国へ渡ろうとしたが、ここにも手がまわっており、やむなく引返
 し、尾高知山で二十余人の敵中に斬り込み「この恨みは三日以内は
 はらしてやる」といって憤死されました。大永七年十一月二十五日
 のこととあります。

しかし、家臣の一人は惟治公の首を敵に渡さず、首を抱えて尾
 根依り下り、北川村瀬口まで降りたところ、驚けなくなり、「お頸振
 」として同地にお祀りし、現在もお祭りが多く、私も史談会の方々と一
 緒にお参り致しました。

惟治公が尾高知で悲憤の最期をとげられた直後、白井
 長景は闘死し、新名一族も滅亡しましたが、やがて惟治
 公の霊は若狭に乗り移り、
 「我は惟治なり。日州へ赴く時、旅の疲れに水を乞い
 たる時一言残すといえども、帰城空しく残念なり。依
 つてわが靈魂をまつり、清浄の地を定め鳥居を建て祭
 らば、行く末村繁昌五穀豊熟、痲難消除に守るべし。」
 とお託宣あつて生死不期に臨り、三日間人ごころなく、
 正氣に成つて尋ねるにさらば覚ゆることなく、これ不思議
 のはじめであつた、と伝えられています。

若狭は駿を切つて定光尼となり、鳥尾山定光寺を創り
 て惟治を弔つていたが、天文七年、若狭の父多田弥四郎
 は富尾大権現を創建されたといひます。しかしなお数年
 間は不作が続き、疫病が絶えず、また村中災難が多かつ
 つたので、村人たちは相日かつて清浄の地を選び、現在
 の神域に社殿を営み鳥居を建てました。弘治三年のこと

だといわれますので、今からざっと四百二十年も前のこととす。冬霜月二十五日、夏は七月二十五日を祭り日と定め、お祭出(神幸祭)・神踊・杖踊、狂言など、永代急りなう勤めるようご立願申し上げたところ、五穀豊熟・疫病退治、村役ゆかにして繁昌すと伝えられています。

また、天和元年の夏祭りには、晴天であるのに俄かに大水が出たりして、神威量り難く村人恐れおのりいて、お祭出、神踊、杖踊など、墨沢の村のある限り急りなく相續けるとの誓願を立てたという。

これらの伝承は神社に伝わる古文書にも残り、私共は祖先から伝わるこの民俗芸能を、いつまでも守り続けなければなりません。

(おわり)

研究

わがふるさと「元田誌」(三)

会員 市野瀬 仁

軍籍者名簿

一八七七年(明治十年)の西南戦争によって、国内戦に終止符をうって以来、わが國が経験した対外戦争を年代順に列記してみると、ほぼ十年に一回の割合でおきていることがわかる。こうして世界の強國の仲間入りができたのであるが、これも明治以来の日本の國是であった「富國強兵」が実を結んだ結果ともいえる。

東アジアの、名も知られなかつた小さな島國日本が、短期間に長足の進歩をとり、日清・日露の戦いに連勝した

ことを、世界の國々は驚いた。とくに東南アジア・インド・トルコ・中南米の後進諸國、なかでもアジア民族の人々に、驚くべきシヨツクと勇氣を与えたことが、今も語り草になつてゐる。

しかし、それから三十年後に勃発した今次大戦の結果を、私達は正直に、冷厳に受けとめねばならない。省みて十年に一回という戦争が数回續いて、どうして國民生活に無理がいかないておられようか。

今ここに、私達の部落から軍隊に籍をおいた人々の、年代と服役地をみると、わが國の戦争史が歴然としてくるのである。

元田地区入隊・志願者名簿 (明治・大正年代)			川野順平 (大正年代)		
水田 重吉	明治十年	熊本縣	川野順平	大正十年	大分連隊
市野瀬 五郎	明治十年	〃	市野瀬 正義	十四年	近衛連隊
荒川 武市	明治十年	北方連隊	市野瀬 林	〃	〃
狩生 房五郎	明治十年	日露戦争	市野瀬 直喜	〃	〃
川野 千代助	明治十年	日露戦争	市野瀬 政喜	〃	〃
荒木 徳五郎	明治十年	〃	市野瀬 直喜	〃	〃
市野瀬 敏吉	〃	〃	市野瀬 政喜	〃	〃
市野瀬 一吉	明治十年	大分連隊	市野瀬 直喜	〃	〃
市野瀬 利義	〃	〃	市野瀬 政喜	〃	〃
荒木 喜佑	〃	〃	市野瀬 直喜	〃	〃
荒木 正行	〃	〃	市野瀬 政喜	〃	〃
本多 寛作	〃	〃	市野瀬 直喜	〃	〃
兒玉 輝喜	〃	〃	市野瀬 政喜	〃	〃

(昭和年代)		
荒木 泉	〃	釜山
市野瀬 直喜	〃	桐浦海兵団
市野瀬 政喜	〃	〃
兒玉 榮一	〃	奈良
兒玉 義孝	〃	高嶺
兒玉 一男	〃	〃